HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	初見視奏のパフォーマンスを規定する要因の解明［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	祁, 京
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14573号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81446
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Jing_Qi_review.pdf, 審査の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：祁　京

審査委員　主査　教授　安達真由美
　　副査　教授　川端　康弘
　　副査　教授　結城　雅樹

学位論文題名
初見視奏のパフォーマンスを規定する要因の解明

当該研究領域における本論文の研究成果

1990 年代以降、音楽心理学では芸術的演奏のメカニズムや演奏者と聴取者の間の表現や感情のコミュニケーションなど、演奏に関する実証研究が数多く行われてきた。しかしながら、西洋クラシック音楽において不可欠であり、多くの音楽大学での入学試験の一つでもある「初見視奏」という技能についての実証研究は未だ限られている。本論文の最も大きな学術的意義は、「初めて見た楽譜を練習せずに弾く」という音楽的行為を「入力」「視覚―運動変換処理」「実行」という三つの情報処理過程に分解することで、これらの処理過程の関連性や、各処理過程でのパフォーマンスに影響を与えるさまざまの要因について、実証的かつ包括的に検討した点にある。具体的には、各処理過程でのパフォーマンスの指標として先行研究で用いられてきた従属変数だけではなく独自に提案した従属変数も算出しそれらの間の関連性を明らかにした。たとえば、視覚―運動変換処理における効率性、すなわち「運指箇所よりもどの程度先読みをしているか」を示す視手範囲（EHS）として新たに提案された「beat-based EHS（先読みの最小拍数）」は、リズムが異なる楽譜での視手範囲を比較する上では、これまで用いられてきた「note-based EHS（先読みの音符数）」や「time-based EHS（固視から運指までの時間）」よりも妥当な指標といえ、今後の初見視奏研究に新たな視点を開いたと言える。また、音楽経験をより詳細な項目（演奏、和声、楽曲分析、聴音、初見視奏など）に分けて「総学習年数」と「過去１年における学習頻度」で測った点は、単なる「楽器の学習年数」で表される音楽経験よりも生態学的に妥当な視点を提供している。さらに、本研究では楽譜が呈示されてから初見視奏を開始するまでに１分間の予見時間が与えられており、その間の予見時行動が「入力」と「実行」に影響を与えていることを明らかにした。中でも「予見中に運指を考えることがピッチエラーの増加につながる」という結果は、初見視奏の学習・指導に実践的示唆を与えるものである。

本論文の第二の意義は、初見視奏実験に加え、「視覚呈示された単旋律の楽譜と聴覚呈示された刺激の同異判断実験」も行っている点である。これにより、「ピアノの学習年数が長いほど単旋律の視聴覚同異判断の成績がよく、そのことが初見視奏における入力処理の効率化につながる」というパス図が示された。初見視奏において楽譜に対する聴覚イメージが重要であることは、これまで内省報告やインタビューに基づく理論的見地から語られることはあっても、定量的に検証されたことは無かった。この点においても、本論文の学術的・応用的貢献は大きいと言える。

学位授与に関する委員会の所見

本論文は、初見視奏における情報処理過程の研究という極めて興味深いテーマを扱っている。入念な先行研究のレビューと新たな発想の組み合わせから練られた情報処理モデルを作り、その一つ一つの段階に影響する要因を、着実かつ基本的な方法論を用いて検討した研究である。筆者は日本語をほぼ独学で習得したにもかかわらず論文構成や日本語表現も優れており、修士課程までは音楽学とピアノ演奏を専門としていた筆者の独自性が光る、とても読みやすい・理解しやすい論文であった。本論文を構成する実験（第２～４章、第７章、第８章）の一部は 2017 年の Asia-Pacific

Society for Cognitive Sciences of Music および 2017 年と 2019 年の International Symposium on Performance Science で発表され、高い評価を得ている。その一方、口述試験では審査委員から、多くの変数を分析するだけではなく、高い相関が認められるもの同士を合成変数にまとめることで、よりシンプルな理論モデルの構築につながるのではという指摘や、総合考察に作業記憶モデルからの議論も加えられるのではという意見も出された。これらの指摘に対する筆者の回答では、本論文の目的が最終的なモデルの構築ではなくあくまでも探索的にさまざまな変数を網羅することであったこと、今後より厳密な統制実験を行いながらより良いモデルを構築していく中で、今回指摘された点を検討していくことなどを言及し、審査委員会として納得できる内容であった。

以上の審査結果から、本審査委員会は全員一致で本学位申請論文が博士(文学)の学位を授与されるにふさわしいものであると判断した。